

## 「重伝建」有松

「重伝建」とは重要伝統的建造物群保存地区の略。名古屋市緑区の有松地区が、今年7月、国よって「重伝建」に選定された。名古屋都市センター106号から。

有松は、近世東海道の池鯉鮒宿と鳴海宿の間に形成された茶屋集落に始まり、尾張藩の保護もあって「有松絞り」という伝統産業とともに発展、絞り商の屋敷と職人の町家が混在する華やかな町並みが形成されていきました。

天明4（1784）年の大火によって、町並みの多くが灰となりましたが、尾張藩の援助を受け復興。その後、幕末にかけて絞り商は火災の経験から防火の工夫を取り入れるようになっていきます。屋根は「瓦葺」、壁は漆喰を塗り込めた「塗籠造り」。一階の腰部分に瓦を張った「海鼠壁」、屋根は延焼を防ぐ「うだつ造り」など、防火技術を用いた絞り商の建物が多く建てられました。

有松の町並みの大きな特徴として、広大な間口を持つ絞り問屋が多く、東海道の他の宿場町に比べゆったりと家屋が連なっています。街道に面し、今も江戸後期から昭和前期にかけての多くの建物が残り、往時の繁栄を伝えています。

有松では、戦後の早い時期から、住民や行政によって町並み保存の取り組みが行われてきました。昭和48年には、町家所有者を中心とした有志によって「有松まちづくりの会」が発足。昭和49年には、「有松まちづくりの会」、奈良県橿原市の「今井町を保存する会」、長野県南木曾町の「妻籠を愛する会」が有松に集まり、「町並み保存連盟」（現在の全国町並み保存連盟）を発足させました。一連の取り組みは、その後の全国的な町並み保存運動のさきがけとなりました。有松は、町並み保存の先陣を切ったのです。

有松は、大学のゼミや社会調査実習で学生がよく調査した。「有松まちづくりの会」



の『有松』74号に、2016年3月卒業の岸上光さん（有松をテーマにした卒業論文は、なかなか読みごたえがある）が「ある若者からみた有松の魅力」と題して寄稿している。さいごの一部を紹介したい。

外から来た若者にとって、有松のまちの魅力は一見して伝わりにくい印象があります。町家のひとつひとつの意匠や工夫は、細部に見られ、現代人にとって馴染みがないからです。しかし、ここにこそ、有松の先人達の「思い」が込められています。この弱点をカバーしようとする取り組みが重要です。その点で「有松あないびとの会」のガイド活動は有効なものとして挙げられるでしょう。

今後も「地域の力」で、有松というまちを、特別な色に「染めて」頂きたいと思えます。

(2016年10月20日)